

ニュースレター

発行者
キリスト教礼拝音楽学会
〒145-0071 東京都大田区田園調布 2-48-12-501
TEL/FAX 03-3721-0891
発行日 / 2015年4月1日

キリスト教礼拝音楽学会 第15回大会案内

★テーマ：キリスト教音楽活動の社会的貢献

★日時：2015年5月30日(土) 10:00-16:30

★会場：東北学院大学土樋キャンパス
8号館1,2会議室

〒980-8511 仙台市青葉区土樋1-3-1
連絡先携帯 090-4223-0805 (手代木)

★主催：キリスト教礼拝音楽学会

★会費：会員 ¥3,000 / 非会員 ¥1,000



●アクセス
JR「仙台駅」から徒歩20分
地下鉄仙台駅より富沢駅乗車、「五橋駅」
または「愛宕橋駅」下車徒歩5分
仙台駅前より長町方面バスにて「仙台市立
病院」前で下車徒歩5分

●プログラム

9:30 -	受付	総合司会 伊東辰彦
10:00 - 10:05	会長開会挨拶	
10:05 - 10:30	研究発表・質疑応答	佐々木悠
10:30 - 10:45	休憩	
10:45 - 11:45	講演 「キリスト教音楽活動の社会的貢献の試み」 佐々木しのぶ(当学会員、東北学院大学非常勤講師)	
11:45 - 13:00	昼食会、自由行動	
13:00 - 13:30	総会	
13:30 - 14:30	礼拝堂見学	
14:30 - 14:45	休憩	
14:45 - 16:30	シンポジウム パネリスト 神部真理子氏(仙石病院内科部長、仙台 I ゾンタクラブ会長、KMA 理事) 土倉 相氏(仙台白百合学園中高教頭、KMA 理事) 平賀真理子氏(仙台南伝道所牧師、礼拝奏楽者)	司会 伊東辰彦
16:30	会長閉会挨拶	

参加申込：5月8日(金)締切・厳守

大会案内の申込書に記入し、下記宛、郵送あるいはメールで、お申し込みください。
多くの方のご参加をお待ちいたしております。参加費は郵便振替口座(キリスト教礼拝音楽学会 02240-3-46335)に大会費と明記し、お振込みください。

申込先：〒145-0071 東京都大田区田園調布 2-48-12-501 手代木方 キリスト教礼拝音楽学会大会係
Tel: 03-3721-0891 (手代木) E-mail: gammo@ka2.so-net.ne.jp

「東北学院大学・^{つちとい}土樋 キャンパス」へ ようこそ！

佐々木勝彦

キリスト教礼拝学会・第15大会は、仙台市にある東北学院大学土樋キャンパスで開催されることになりました。今回、初めて仙台を訪れる方、あるいはこの土樋キャンパスの建築物の歴史に興味のある方のために、ひと言その魅力を紹介させていただきます。

・早速、ご案内いたしましょう。まずJR仙台駅から地下鉄・富沢行に乗り、ひとつ目の駅「五橋(いつつばし)」で降りてください。そこから約五分歩くと土樋キャンパスです。正門に着いたら、少し余裕をもって、眼前の三つの建物を見くらべてください。正面が本館、右手が礼拝堂、そして左手が旧シュネーダー記念図書館(現・大学院棟)です。この三つの建造物は、2014年7月に「登録有形文化財」に登録されました。

・本館は、1926(大正15)年、東北学院の専門部の新校舎として建設されたものですが、1923(大正12)年の関東大震災後に、米国人J. H. モルガンによって設計されたことから、耐震性も念頭に置いた構造となっています。そのため、2011年3月11日の東日本大震災の激震にも耐え、現在も大切に使い継がれています。チューダー・ゴシック調にデザインされた三階建ての建物の外壁には、温泉地として有名な仙台近郊の秋保の自然石(長峰石)が用いられています。しかし現在では、この自然石が手に入りにくく、建設当時の状態を保存するのが難しくなっています。

その「悲劇？」の跡は、左側の建造物にみるができます。この建物も元来は、本館、礼拝堂と同じ質感をもつ壮麗な建物でした。新しい修復技術の開発を願わずにいられません。かつては、正面玄関を入ると、「エホバを畏るは知識の本なり」(箴言1・7)という文語訳聖書の言葉が目飛び込んできました。それは東北学院の目指す「知」のあり方を明確に示していました。現在は、大学院棟として用いているため、小さな部屋に細分化されていますが、元来は、礼拝堂と同じく高い天井をもつ本当に静かな学びと思案の空間でした。なお、この旧図書館が建造されたのは1953(昭和28)年ですが、本館の建造が1926年、そして礼拝堂の建造が1932年であったこと

を思い起こすと、仙台空襲と敗戦をはさみ、27年の歳月をかけてようやく、学びの場、礼拝の場、そして研究の場の三つがそろったこととなります。それは、東北学院が1886(明治19)年、「仙台神学校」として出発してから、実に、67年後のことでした。先人達が抱いてきたキリスト教教育への熱い思いが伝わってきます。その後、この旧図書館は、1964年と1966年、大幅に手を加えられ、現在に至っています。

・正門から右手に見えるのが礼拝堂です。この建物には現在では三つの入り口があり、どの入口から入るかにより、その印象はまったくちがってきます。

今回は、正門の前にある小さなロータリーの右手にある入口から入ることにしましょう。少し急な階段ですが、昇る前に、目を上げると、入り口の扉の上に「ラーハウザー記念礼拝堂」という文字が刻まれていることがわかります。このラーハウザーとは、第二代院長シュネーダーが、米国で1929年から1930年にかけて高等学部講堂のために行った募金行脚の中で、その趣旨に賛同し、一人で5万ドルという多額の金額を献金してくれた未婚の女性です。彼は、彼女について「牧師の令孫で、きわめて質素な生活を営んでゐるピッツバーグ市の方」「彼女は自分自身の為に生活せずして専ら主の為教会の為の生活を営みつつあり。彼女は其の祖父の如く誠に質素にして謙遜、而も其の精進と慈善行為とは……敬服すべきものである」と述べています。しかも彼女は、この後、1929年10月24日(木)にニューヨーク株式市場における大暴落と共に始まった世界恐慌のなかで「いっさいの財産を失ってしまうが、なお神への賛美を絶やすことなく日を送った」と『東北学院百年史』(599頁)は語っています。

・階段を上り、真ん中に進むと、左手に階段、そして右手にステンドグラスが見えてきます。そうです、実はこの階段が正面階段で、そちらから入るとまた別のことに気づきます。現在左手にある手すりの下にあるべき支柱がきれいに切り取られています。これは1943年に行われた「金属献納」の傷跡であり、このときは礼拝堂のシャンデリアも撤去されました。しかし幸いにも、パイプオ

ルガンは持ち去られず、ステンドグラスも破壊されませんでした。ただし、戦局が厳しくなると、礼拝堂全体が軍に接収され、ステンドグラスはベニヤ板で覆われました。

・この礼拝堂のステンドグラス、説教壇、聖書朗読壇、正面の聖餐台は、すべて献金によって設置されたものです。英国製のステンドグラス(4500円)の為に指定献金したのはミセス・シュネーダーの2人の幼友達、アメリカのモーラー社製のオルガン(14000円)のために特別献金したのは、シュネーダーの在米の友人18名でした。そして、左右の説教壇と聖書朗読壇、正面の聖餐台の為に献金したのは、メアリ・ゲルハードとその姉妹たちでした。このように、東北学院のキリスト教教育の充実と諸施設の拡充は、内外の多くの祈りと献金によって初めて可能になったのです。

・このステンドグラスのテーマは、「ルカ福音書24章51節」に基づく「イエス・キリストの昇天」となっています。しかしなぜこのテーマが選ばれたのかということについて語る資料は見つかっていません。その後、1988年に作られた泉キャンパス礼拝堂(1200席)のステンドグラスは、土樋キャンパス礼拝堂(900席)のステンドグラスをふまえて、「イエス・キリストの十字架、復活、昇天」(田中忠雄)を描いています。また、1962年に開設された多賀城キャンパス礼拝堂(1000席)のステンドグラスは「初めに、神は天地を創造された」(創世記1章1節)をモチーフとしています。

・パイプオルガンの演奏台は、最初、左手の上のバルコニーにありましたが、1978年12月に、ドイツ・ハンブルク・ベッケラート社のオルガン(45ストップ)を入れる際に、現在の位置に移されました。古い演奏台は、正面右のパイプの下に展示されています。この後に導入された泉キャンパスのオルガン(57ストップ)はフランスのアルフレッド・ケルン社製、そして多賀城キャンパスのオルガン(34ストップ)はドイツのカール・シュッケ社製です。これらの多様なオルガンを十分に生かしたプログラムを立案・遂行できるかどうか、それは今後の課題です。

・この土樋の新しいオルガンを入れる際に、興味深い話し合いが行われました。それは、オルガンをどこに設置すべきかということをめぐる議論でした。学校側は、従来どおり前方に設置すべきであると考えていました。

ところが、オルガン設置検討委員会は、むしろ礼拝堂の後方のバルコニーが望ましいという案を第一案として提出しました。それは、礼拝とは何か、礼拝で用いられる楽器とは何かといった、すべてを根源から問い直す姿勢から出てきた神学的な提案でした。オルガンを前方に設置するのはアメリカの伝統であっても、それは原則ではなく、オルガンはむしろ自らを隠し、音によって包まれた空間を提供する役割を担っているのではないかと、そしてそのためには、後方に設置すべきではないかという発想でした。最終的に、この案は退けられ、現状の形になりましたが、それは、「なぜ毎日礼拝を行うのか」という本質的な問いを共有するきっかけともなりました。

・礼拝堂から出て、正面の階段を下り、すぐ右に曲がって下さい。建物に囲まれた空間の正面に、古ぼけた木造建築らしきものがみえるはずですが、それが、2013年3月に登録された「登録有形文化財」です。それは、東北学院の教授で宣教師であったシップルが住んでいたことから「シップル館」と呼ばれていた宣教師館ですが、現在は「デフォレスト館」(1887(明治20)年建築)と呼ばれています。

この通称変更は、それまであまり語られることのなかった、東北学院と同志社という二つのキリスト教学校の創始者の出会いの物語を再発見する機会となりました。東北学院は、押川方義、W. E. ホーイ、D. B. シュネーダーを三校祖と呼んでいますが、この三人とも宣教師デフォレストに出会っており、このデフォレストが四半世紀の長きにわたって住んだ住宅が「デフォレスト館」です。

・デフォレストは、1844年にコネチカット州に会衆派教会牧師の子として生まれ、1874年、アメリカン・ボード(米国海外伝道協会)から派遣宣教師としてコロラド号で日本に向かいました。この船には、すでに既知の間柄であった新島襄も乗船しており、デフォレストは、最初、西日本で伝道活動を行ないました。ところが、1875(明治8)年に同志社を創立していた新島は、1885(明治18)年、旧仙台藩士の日銀副総裁富田鉄之助、仙台区長松平正直らの支援を得て、仙台にもキリスト教主義の学校をつくる計画をたて、デフォレストにも強力を要請しました。

この新島が校長となり、デフォレストが理事また英語と聖書の教師として教えることになったのが、1886(明治19)年9月に開学した「宮城英学校」のちの「東華学校」です。デフォレストは、自宅である「デフォレスト館」から毎日この学校にかよいました。ところが、キリスト教

色を排除しようとする時代の趨勢に押され、「東華学校」は、わずか五年半後(1892年3月)に廃校になります。しかしデフォレストはその後も仙台の地に留まり、東北伝道のために、説教者、講演者として活躍し、その遺骨は仙台市郊外の北山墓地に、妻、娘と共に眠っています。デフォレストが亡くなったのは1911(明治44)年5月8日であり、その葬儀において説教を行ったのは東北学院第二代院長 D. B. シュネーダーでした。

・東北学院の校祖押川方義と W. E. ホーイは、1886年、六人の生徒と共に「仙台神学校」を開校しました。しかしこの1886年は、「宮城英学校」が開校された年でもあります。この二つの学校の開校は偶然だったのでしょうか。それとも何か関係があったのでしょうか。

その歴史を辿ってみると、この二つの学校の間には、思いもよらない関係があったことが分かっています。押川もドイツ改革派教会宣教師 W. E. ホーイの協力を得て、同時期に「英学校」を建てる構想をもっていました。そしてそのために、押川は新島側と粘り強い交渉をしました。しかし両者の間には、教派の違いもあり、二つの案を統合することはできず、「東華学校」が先行スタートする形になりました。ところが、「東華学校」は、五年半後に、つまり1892年3月に廃校になってしまいます。しかも1891年9月11日に、「仙台神学校」は校名を「東北学院」と改称しています。このタイミングはあまりに絶妙であり、二つの学校の間には、何か話し合いがあった

のでは?と考えずにいられなくなります。その詳細は必ずしも明らかになっていませんが、「東華学校」が廃校になると、その中から「東北学院」へ移籍した学生も少なくありませんでした。この歴史的経過を、『同志社百年史』は「まことに皮肉なこと」(287頁)ではあるが、「新興の東北学院によって新島の意図は受けつがれたものと考えてよい」(287頁)とし、『東北学院百年史』は「歴史の動きの不思議」(316頁)と評しています。

1892(明治25)年、押川は初代院長に、W. E. ホーイは副院長にそれぞれ就任し、さらにその九年後、つまり1901(明治34)年には、D. B. シュネーダーが第二代院長に就任しています。

「シッフル館」から「デフォレスト館」へという通称変更の背後には、このように東北学院と同志社の思わぬ出会いの歴史があったのです。

なお、この建築物の「登録有形文化財」とされた理由等については、文化庁発行『デフォレスト館・ハンドブック』(2013年10月)をご参照ください。

短い案内でしたが、いかがでしたでしょうか。ぜひ仙台にお越しいただき、御自分の目で確かめていただければ幸いです。キリスト教礼拝音楽学会第15回大会でお会いできることを心より、楽しみにしております。

(当学会員・東北学院大学教授)



(a) 礼拝堂
(b) 本館
(c) 礼拝堂の正面ステンドグラス
(d) 礼拝堂のパイプオルガン

雑考

《たんたんたぬきの》と讃美歌

手代木俊一

昨年、「テレビで顔を見ました」と書かれている年賀状を何通かいただいた。そのテレビ番組とは、2013年10月22日23時～23時30分の『有吉弘行のダレトク!』という番組のことであろう。この番組の取材で《たんたんたぬきの》と讃美歌に関して話をした。

テレビの取材を受けた人はよくご存じのことと思うが、取材時間が長いわりに、登場時間が短く、しかも伝えたいことがカットされている場合が多い。ここで《たんたんたぬきの》と讃美歌について、すなわちどうして讃美歌の曲があのような戯れ歌になったのかを、番組では放送されなかった部分をも含めてお話ししてみたいと思う。

戯れ歌《たんたんたぬきの》の原曲が讃美歌《Shall we gather at the river》、チューンネーム曲名《Beautiful River》であり、1864年アメリカの牧師ロバート・ローリーの作詞作曲で、日本で翻訳され現在も歌われている《まもなくかなたの》ということはかなり知られるようになった。例えば1995(平成7)年、スタジオジブリの映画『平成狸合戦ぽんぽこ』ではこの曲が5回バックに流れ、死を覚悟して攻撃に向かい、絶命した後にもこの曲が流れ、しかもアメン終止で終わっている。この映画の作者が《たんたんたぬきの》の原曲が讃美歌であることを知っていたためであろう。また黛敏郎が司会をしていたころの『題名のない音楽会』でも取り上げられたと記憶している。

まず《たんたんたぬきの》の歌詞で一般によく知られており、番組で紹介された歌詞を以下に掲載する。

たんたんたぬきの×××は 風もないのにぶ～らぶら
それを見ていた親だぬき おなかを抱えてワッハッハ

ただこの歌詞には場所によって違いがみられる。最初の1行は同じだが、2行目にはその土地固有の歌詞となっている。北から南へと列挙する。

秋田
それを見ていた子だぬきは 父ちゃんいいもん持つてるね

宮城
それを見ていたメスゴリラ バナナと間違え食べちゃった

大阪
それを見ていた子だぬきも 僕も欲しいと泣きだした

京都
それを見ていた子だぬきも 親のまねしてぶ～らぶら

岡山
それを見ていた親だぬき 片足あ～げて尻をこいた

福岡
それを見ていたブルドック 何かと思って噛み付いた

「それを見ていた」までは共通で、歌詞に「子だぬき」、「親だぬ

き」という言葉が使用されているものはユーモアに満ちているが、「メスゴリラ」、「ブルドック」を用いている歌詞は少しブラックユーモア感があると思われる。「ブルドック」を用いている歌詞はこれ以外に、「それを見ていたブルドック ××××めがけてとびついた」か「それを見ていたブルドック ××××めがけて噛み付いた」という歌詞を聞いた覚えがあるが、子供の頃福岡で聞いたものか、福岡出身の人から聞いたのか記憶が定かではない。

さて、私事にわたって恐縮だが、わたしは小学校4年生(1960[昭和35]年)の頃教会の日曜学校に1年間通っており、讃美歌を毎唱歌った。しかし現在まで覚えている讃美歌は《まもなくかなたの》1曲である。印象の強い曲であり、印象に残る歌詞であり、曲と歌詞がよくあっていたためだと思われる。当時《たんたんたぬきの》も歌っていたが、両者が同一曲ということには気が付かなかった。

この讃美歌《Shall we gather at the river》=《Beautiful River》は、どのように紹介され、現在に至ったのであろうか。ロバート・ローリー 1864年作の《Shall we gather at the river》=《Beautiful River》は1873～4(明治6～7)年には翻訳され、日本語の讃美歌になった。組合系の『高木玄眞筆写本』(大阪 1873～4年)に第8《流水天にあり》として収録され、また一致(日本基督一致)教会系『讃美歌(さんびのうた)』(横浜 1874年)に第17《われ、天のみずに》という讃美歌になったが、その後受け継がれていない。バプテスト派では1896(明治29)年刊の『基督教讃美歌』で第288番《われら天のみずに》として収録されているが、その後継承されていない。一方福音系では中野羽後訳『まもなくかなたの』が『聖歌』(いのちのことば社 1958[昭和33]年)に収録され現在に至っている。

しかし讃美歌から直接《たんたんたぬきの》の曲になったとは考えにくい。ましてや歌詞の影響はまったく見られない。また翻訳された時期の空白期間が長すぎ、この曲を讃美歌として聴いた人、歌った人は少数と考える。では、どうして讃美歌の曲が《たんたんたぬきの》になったか想像してみたいと思う。

わたしは讃美歌の曲が《たんたんたぬきの》になったのは一度この曲だけが全国に普及し、もともと讃美歌と知らずに、その曲に《たんたんたぬきの》の歌詞を付け普及したもので、そしてその転換点をつくった人物がクリスチャンの永井(新姓瓜生)繁子であったと考える。

永井(瓜生)繁子は1871(明治4)年、岩倉遣欧使節団と同行した女子留学生5人の一人で、当時10歳。ヴァッサー・カレッジで音楽(ピアノ等)を学び、帰国後音楽取調掛(後の東京音楽学校、現東京芸術大学)、女子高等師範学校等で教鞭をとり、日本の音楽普及につとめた。

永井(瓜生)繁子については、生田澄江著『舞踏への誘惑 日本最初の女子留学生 永井繁子の生涯』(文芸社 2003[平成15]年3月)、瓜生繁子 もう一人の女子留学生』(文藝春秋 2009[平成21]年3月)に詳しい。

『舞踏への勧誘』で彼女はアメリカ留学中日曜日には午前中は教会に行き、午後は教会の日曜学校に行ったこと。帰国後は築地のユニオン・チャーチに通い、彼女の行動のバックボーンは終世キリスト教の信仰に基づいていたことが書かれている。当然《Shall we gather at the river》=《Beautiful River》を知っており、歌った経験もあったと思われる。

また彼女は1899(明治32年)に行進曲集『進行曲 Marches』(十字屋)を編曲・刊行している。この『進行曲 Marches』に《The Beautiful River》という曲名であの讃美歌の曲《Beautiful River》が登場する。『進行曲 Marches』は明治40年には5版を刊行している。生田著『舞踏への勧誘』によれば、「その後20版を重ね、地

方の学校からまとめて注文があり、十字屋出版物の中によく売れた一点」とのことである。

その後政府公認の行進曲集『進行曲粹 教科適用 第一集(文部省検定済) Collection of Marches』(大阪開成館 明治37 [1904]年11月)が刊行され、タイトルはなく、ただno. 11として『The Beautiful River』と同曲が収録されている。これは1968(昭和43)年には27版となり、また国会図書館では1999(平成11)年には64版になっている。明治、大正、昭和、平成と引き継がれ、しかも学校の場面で使用され全国的な行進曲として多くの人が運動会等で聞いていたのではあるまいか。

運動会といえば、明治のジンタと呼ばれる民間音楽隊の系譜であるブラスバンド、北村大沢楽隊はつい最近まで宮城県石巻市北村大沢地区を中心に活動し、平成の時代でも石巻市北村小学校で運動会の際、バックで演奏していた。彼らのレパートリーの一つに『シシラ』という曲名で『Beautiful River』があり、CD北村大沢楽隊『疾風怒濤!!! Strum und Drank old times brass band』(Off note ON-58 2005 [平成17]年)で聴くことができる。この例から見てもこの曲が明治、大正、昭和、平成と引き継がれてきたことが判る。まさに時代を超えた記憶に残る名曲と言えるであろう。

そろそろ結論に到りたい。この曲が『たんたんたぬきの』になったのは一度前述のように行進曲になったからではないだろうか。

歌詞がないのでこの曲を覚えるのに「タンタンタタタータ」とリズムをとっているうちに『たんたんたぬきの』が誕生したように思える。この曲は行進曲として全国に普及していたので何らかのきっかけでどの地方でも歌われ、その地方の差が後半部分にあらわれたものと考えられる。

この讃美歌『Beautiful River』をはじめ、行進曲に採用された讃美歌の曲や南北戦争の歌にはピョンコ節のものが多い。それまでの日本に少ないリズムである。

このピョンコ節では多くの歌詞を歌うことができる。滝廉太郎は浪々と歌う『荒城の月』では、付点の少ない音譜を中心に曲をつくったが、歌詞の多い『箱根八里』ではピョンコ節で作曲している。明治に生まれた讃美歌、唱歌、軍歌は曲としては短いものばかりである。この短い曲で多くのメッセージを伝えたい場合、それまでの日本の音楽ではなく、南北戦争の歌や讃美歌の曲を持つピョンコ節が必要だったと考える。

メッセージ性と言えばコマーシャル・ソングだが、『リパブリック讃歌』と讃美歌『Beautiful River』を2つのカメラ店(ヨドバシカメラ、ビックカメラ)がコマーシャル・ソングとして現在使用している。明治に伝わった南北戦争の歌と讃美歌が現在も形を変えながら息づいている一例であるといえよう。

(当学会副会長)

★役員会報告

①日 時：2014年9月7日(日) 14:00-15:30
場 所：奏かなで(池袋：東京芸術劇場2F)
出席者：赤井、新垣、伊東、佐々木、手代木
議 題：学会誌、ニュースレター、第15回大会について

②日 時：2014年11月2日(日) 14:00-15:00
場 所：奏かなで(池袋：東京芸術劇場2F)
出席者：赤井、伊東、植木、佐々木、手代木
議 題：学会誌、ニュースレター、第15回大会について

③日 時：2015年1月25日(日) 14:00-15:00
場 所：奏かなで(池袋：東京芸術劇場2F)
出席者：赤井、金澤、手代木
議 題：学会誌、ニュースレター、
第15回大会の詳細について、選挙について

★学会誌発行予定

第15号 学会誌……4月半ば刊行予定

内容・巻頭言……植木紀夫

- ・論文……前川公美夫
手代木俊一
佐々木悠
佐々木しのぶ

・第14回大会プログラム・報告……伊東辰彦

★会員出版物の案内

募集

編集委員会より会員の新聞行物を掲載し、皆様にご紹介したいと思います。編集委員(手代木、佐々木宛)までお知らせください。

★会費納入のお願い

会の運営に対して、いつも支援をいただき感謝申し上げます。2015年度会費、また、2014年度の会費を納入されていない方は、ぜひ下記の口座にお振込みください。よろしくお願いします。

キリスト教礼拝音楽学会

郵便振替口座 02240-3-46335

入会金：3,000円(入会時のみ)

年会費：正会員 6,000円

準会員 3,000円

賛助会員 20,000円

●振込用紙には* ____年度/正・準・賛助会員/会費 _____を必ず明記の上、ご送金ください。

●住所変更等も、ぜひお知らせください。

●会費納入についてご不明なことがございましたら、下記にご連絡をお願い申し上げます。

会計担当 佐々木しのぶ

〒980-0023 仙台市青葉区北目町6-6-1401

TEL/FAX 022-262-6565

Email:sshinobuorg@ybb.ne.jp